

人外にねとまりしてゐたから。

水銀劑を淺草の黒瀬から貰つて、僕はそれを飲み續けた爲に胃を壞はして、めしは一食にしてゐた。

齒莖から毎朝一合程血が出た。脚が痺れてゐた。だから僕は自分の死期の近づいてゐる事を豫想してゐた。十二年ばかり前から戀してゐる國の女に手紙を二回ばかり書いた。

有島武郎を殿水に紹介して貰つて、三四回訪問した。

「君は孤兒院出身だとか聞いてゐましたが、お父さんもお達者なのですか、僕の父の友人に高橋新吉と云ふ人がありまして」とか、「北海道の男で、君の様な思想を持つた男が一人居ますよ、今牛込の方に借りた僕の家に居ますから、行つて話して御覺なさい、紹介狀を書きますから」とか有島は言つた。

僕は房洲の黒瀬の別荘に、十日ばかり自炊してゐて、秋刀魚の澤山とれる頃、さんまと一緒に船で東京へ歸つて、原稿料が少し這入つたので、國へ歸ろうかと思つた。

カイザーの朝から夜中までを本郷座で見て、翌日牛込の淺野の下宿へ行く途中、通行人を見て